

教員採用試験対策や教育実習等の個別指導を通じた 教職課程の学生の教職観の育成

引地力男*

Fostering of the view of teaching profession of the teacher-training course students through personal coaching for teacher employment examination and practical training

Rikio HIKIJI

(Received October 27, 2022)

Abstract

There are many students aiming at being teachers and entering the teacher-training course, including the department of education. However, because of the influence of the news about the bad images of schools and teaching practice failure, the number of teacher applicants decreases year by year. Even if the students of the teacher-training course meet with any situation, it is important to acquire the high-quality technical knowledge and the sincere attitude toward children and parents for improvement of the quality of education with their firm convictions. The purpose of this study is to have them learn the view of teaching profession deeply and establish the ideal teacher image through the personal coaching for passing the teacher employment examination and practical training rather than to have them pass the teacher employment examination. As a result, it was found that they could change the former view of teaching profession and continued learning the ideal teacher image even after the examination was over.

Key words: view of teaching profession, teacher-training course students, personal coaching, teacher employment examination, practical training

1. はじめに

わが国の国立の教員養成大学・学部の教員就職率は昭和54年度の78.5%をピークに平成11年まで32%まで減少し、その後令和3年3月卒業では59%と横ばい状態であり¹⁾、私学も含めすべての学校現場で教員が不足している²⁾。また、教員採用試験の倍率も低迷しており³⁾⁴⁾、質の高い教育の確保するためには教員養成機能の強化対策は喫緊の課題となっている。

これまで教職課程の学生を対象にした教職からの志望変更について数多くの機関で調査されており、おもな理由として、「子どもや保護者との関係をうまくつけれない」、「学校に対してブラックなイメージを持っている」、「授業に自信がない」などが報告されている⁵⁾¹¹⁾。本学の教育学部においても、平成

27年3月卒業生の中で教員採用試験を受験しなかった学生へのアンケートによれば、3年生の教育実習の後に教職からの進路変更を考える学生が多くなり、その理由として多いほうから「違う仕事に興味をもった」、「自分に向いていないと感じた」、「教師になる自信をなくした」の順となっている。

これらの課題解決のために、教職支援センター、教員採用試験対策講座やセミナー、教職キャリア支援室などの設置により、教職に関するキャリア支援が全国の大学において積極的に実践されている¹²⁾¹⁵⁾。このように、組織的な取り組みの事例は数多く紹介されているが、教員による個別指導の事例は少ない。

本報での個別指導は、単に学生が教員採用試験に合格するための学習指導だけではなく、将来教職に就くための教職観や社会人としての人間力の育成を目指すものである。本報は、平成25年1月から10年間において教員採用試験に向けた学習および教育実習や出前授業および勉強合宿等の個別指導を通して

* 熊本大学大学院教育学研究科

実践した教職課程の学生の教職観の育成の手法とその成果について報告する。

2. 個別指導の手法

2.1 指導の経緯

平成24年12月に3年生と修士課程1年生を対象に厚生・就職委員会主催の教員採用試験対策の勉強合宿が実施された。その際に著者は、模擬授業、集団討論、全体講義（一般常識）にかかわった。合宿終了後、複数の受講生から継続した指導の要望を個人的に承り、平成25年1月より、個別指導を開始した。その後、卒業生からの口コミや、ゼミ担当教員の助言等で毎年指導に携わり、令和3年3月までに個別指導で5回以上来室した受講生の総数は270名であった。1回でも来室した受講生も含めるとその総数はかなり多くなる。

本個別指導の目的は、単に学生が教員採用試験に合格するためだけではなく、卒業後40年にもわたる教職生活の中で、児童生徒および保護者や地域住民としっかり向き合う姿勢を身につけるための自分自身の教職観を受講生自身で時間をかけて構築することにある。個別指導の要点を表1に示す。例えば、面接試験において想定される質問に対する回答について受講生から回答例を求められても決して教えず、自分自身で正解にたどり着くまでのプロセスを重視している。したがって、試験合格だけを目的としている受講生は一度指導を受けた後、再び来室してくる例は少ない。しかしながら、学び続ける姿勢が身についた受講生は、夏の試験が終わった後も、卒業研究も同時に進めながら継続して3月の卒業式前日まで指導を求めて訪問してくる。すなわち、卒業まで、次年度試験を受ける3年生や修士課程1年生と肩を並べて学んでいる。受講生が希望する項目は「願書作成」、「論作文」、「集団討論」、「模擬授業・場面指導」、「面接」、「教職に関する講義」で、表1の1から6の要点に基づいた指導をおこなっている。指導は完全予約制で、図1に示すように、授業や会議などの空き時間に、30分おきに受け入れており、指導の終了時に次回の予約を受け付けている。表1に記述してあるように、他者に迷惑をかけないために時間厳守で運営しており、遅刻や連絡なしのキャンセルの場合は次回以降受け付けないことにしている。約束を守ることは、児童生徒および保護者との信頼関係の構築に重要な要素である。また、毎日来室してくる受講生や、1日複数回指導を希望する受講生など積極的な学びの姿勢がみうけられ、卒業までに200回以上来室した受講生もいた。平日の17:30まで

表1 指導の要点

1	児童生徒および保護者の立場で考える。
2	山積する課題について、政治・経済および教育委員会を含む自治体などの他責にせず、自分自身で解決する手立てについて深く考える。
3	他者の意見を素直に傾聴する（必ずしも同意は求めない）。
4	固定観念および先入観を取り除く。
5	答えについて時間をかけて最後まであきらめずに自分自身の力でやり抜く。
6	約束は厳守。

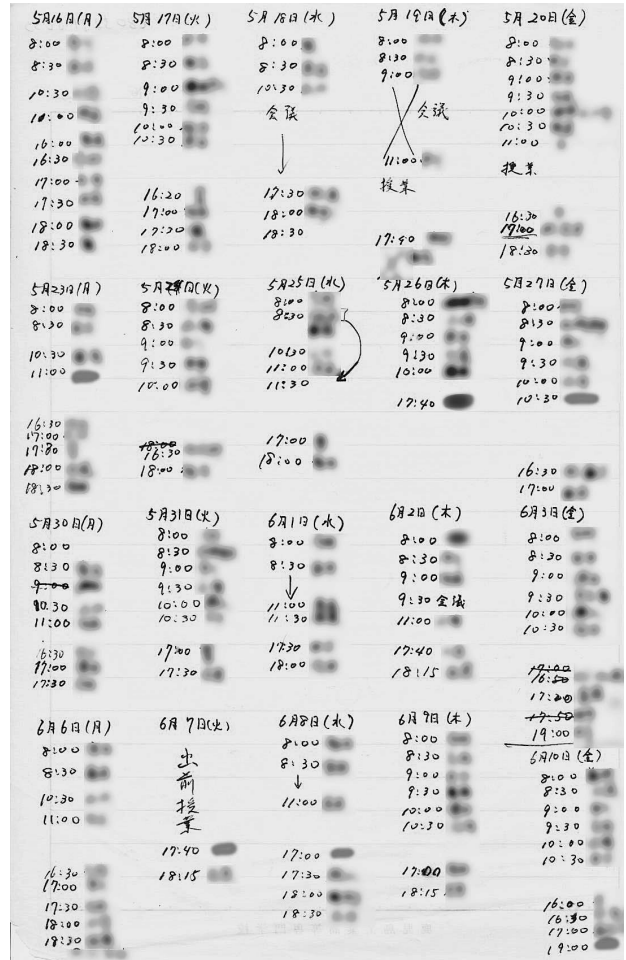


図1 指導スケジュールの一例

は教育学部の学生が中心で、それ以降や土曜日は文学部や理学部などの開放制学部の学生や臨時採用で熊本市内で教鞭をとっている本学卒業生を対象に指導している。

2.2 教材

先述したように、正解を教え込まず、そこにたどりつくまでのプロセスを重視しているため、受講生がもがきながらも最後まであきらめずに正解にたどり着くまでサポートしてくれる教材が必要である。教材は、まず社会問題や学校現場の実実を知ること

に重点を置き、新聞記事とドキュメンタリー動画を使用している。新聞記事は、学校現場や教育に関する内容のみならず、社会、経済、政治、科学技術などのトピックスも含め、年間120件程度整理して受講生に通学や病院の待ち時間などわずかな時間を利用して考えをまとめるトレーニングを推奨している。特に社説の場合は同一テーマの複数の新聞社の例を取り上げ、同じテーマであっても各新聞社によって記述内容が異なるため、多面的・多角的捉え方やクリティカルシンキングのトレーニングにふさわしい教材となる。ドキュメンタリー動画は、いじめ、子どもの貧困、特別な配慮の必要な子ども、外国籍の子ども、SDGs、クラブ活動、生徒指導、課題解決型授業など地上デジタル放送のみならずBSやCSの番組を個別指導用に30分から120分に編集したものをを用いている。そのため、常に複数の新聞とテレビ番組表に目を通し、受講生に新鮮な情報を提供するように心がけている。

2.3 指導のこだわり

受講生の多くはまじめで、自分なりに真剣に教員採用試験に取り組んできた学生がほとんどである。公務員予備校をはじめとする複数の対策講座を受講している学生もいた。したがって、教員志望に消極的な学生と比較して教職観がしっかりと形成されており、正義感や自己肯定感が過度に強い傾向がみられる。しかしながら、担任として、40名近い児童生徒および保護者の異なる価値観に対して、傾聴や受容の態度を妨げる元凶となるのが「自分自身で正しいと思っている教職観」である。自分が正しく、児童生徒や保護者のほうが間違っているという考え方は解決の糸口がみいだせないだけでなく、信頼関係を築くことが困難である。相手に自分の意見を理解してもらうためには、まずその前に相手の意見を素直に受け入れる態度が身につかなければならないと考える。本個別指導では図2に示す手順で受講生の俯瞰的・多角的視野の形成に努めている。特記すべきこととして、簡単に褒めず、自分でもがきながらも考え抜いて能力以上に努力し解決にたどり着いた場合のみ褒めている。一般に、「頑張っても褒められない、認められない」と学生が消極的になる危険性も考えられるが、図2の手順で指導を丁寧なきめ細やかに継続的に進めることで、「自分のやったことを認めてもらう」まであきらめずに訪問してくる受講生が多い。なお、固定観念や先入観を払拭する機会が最も多いのが集団討論であり、他者からの感謝を味わえる体験が出前授業などのボランティア活動である。なお、図中の創造的破壊とは、

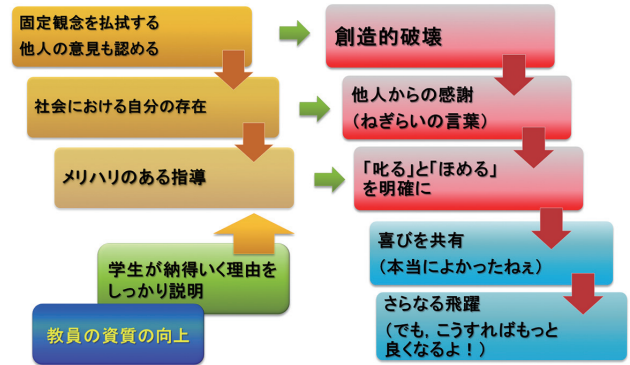


図2 受講生にやる気を持たせるコツ

解決できたことに満足せず、さらによいものを目指して研鑽を重ねる態度のことを意味する。

3. 具体的な指導の紹介

3.1 願書作成

教員採用試験を受験する前に願書作成で勝負が決まる可能性が考えられる。したがって、審査員にアピールしたい内容を伝わりやすい文章で作成する必要がある。志望動機で多い事例は、「地元なので教員となって地元之恩返ししたい」、「山や海など自然が美しい」、「小(中)学校の担任にあこがれて」などである。ここでは、「受験する自治体の子どもたちのために、自分が具体的に実践すること」を中心に書くように指導している。そして、審査員に記述内容が本気であることが伝わるように、これまでの経験内容を根拠として教員としてやる気に満ち溢れた願書に構築していく。図3に願書の作成指導例を示す。子どもたちのために実践することとそれを証明する根拠、自分の強みを教育現場に生かす決意、経験からくる自信ややる気をわかりやすく文章にできるまで指導している。なお、図3の受講生の場合はクラブ活動の経験を生かした内容であるが、クラブ活動やボランティア活動の経験がない場合は、受験する自治体が抱えている課題を一つ取り上げ、その解決に対して地域の特徴を生かした独自のアイデアと実現可能な手法を明示し、それにより残留する課題についての具体的な研鑽内容と実行の決意を記述させている。

3.2 論作文

論作文は小論文や論述試験とも呼ばれ、自治体によって800字から1500字など文字数が異なり、題目としては生活・学習指導、社会問題に対する所見、教科指導などに関するテーマが多く出題されている。初回の指導で感じる問題点は、インターネット掲載

テーマ「自分のクラスのいじめを無くすために、どのように取り組むか」	
① 今までの授業で悔しかったことと反省していることを話し合っている。 「このことでも声を上げてほしい」という声も出てきた。 自分も教員になったら、先生が5分、10分くらいは、	② 先生の「差」を「差」に変えることに 感動した。変えようとする 自分一人と違うことを言葉にするのが困難 周囲も受け入れられることが大切だ。 受け入れるための工夫は何か？
③ 先生がみんなの行動のいいところを 言葉で褒めた。声かけをする中で これも率先して行動するつもりだ。 自分の力ではできないことを思った。 自分自身も先生に教わることが多いと思った。 この授業にも積極的に参加して。 Good!	④ 先生個人に対して希望があった。 水かけの準備ができた。無理のない 学習の中で自分の周囲とつながる部分を 見せたいように授業が展開していた。 先生は「クラスが雰囲気よくあつた」 褒められたと思った。 褒められる？
⑤ 自分のこと以外に他人の差を個性として 捉えることは「時間」が掛かる。 この考えはこれから親と先生で終わる ことで、小学校卒業しても、今後人生を生き ていく中で忘れないで欲しいと思った。	⑥ 先生が「自分にあきらめず子ども に寄り添う」先生の行動に感動した。 子どもが周囲の自分の違うところを知る 人を受け入れる。 自分も子どもに寄り 添うように自分も努力したい。 Good!
⑦ 自分自身のことを変えようとする児童に 言葉で話した。これを児童に発表させた。 主体的に取り組むことができた。女子児童が 泣いて悔しかった。	⑧ 先生が変えようとする児童の存在は、認め ているだけで大丈夫だと思った。先生は 他人を受け入れる姿勢を学んだ。 自分の弱さを見せる授業で周囲は優しくしない 信頼関係の構築に 何の工夫？
⑨ 先生は、課題や計算問題でつまづいて いる時でも声かけに感動した。先生の言葉 に教わった。自分が変えたいところを 先生に話していた。最後まで諦めず 人に力を貸していた。	⑩ 小学校高学年とも同じように自分と比べて いる「低学年時期」もある。「どう頑張っても 」という声掛けによって認められたのを感じ、安心して クラスで居ることができると感じた。みんなが自分 を変えようとする中で、自分ではできない ことを受け、心が軽くなることを考える。

質問：5分組担任 先生がなぜ突然進退したのか？

図8 集団討論での受講生の意見のメモ

より、自然と「相手の立場に立って考える」態度が身につき、児童生徒および保護者の立場に立って考える教職観が育成されてきた。

3.4 模擬授業および場面指導

模擬授業および場面指導は5分から20分と自治体によって異なる。自治体で授業内容に指定がない場合は、限られた時間の中で授業の導入部、展開部のいずれかを選択し、児童生徒に一番伝えたいことを柱にして授業をつくるように助言している。導入部では授業を日常生活とつなげることに重点を置いている。なお、場面指導の場合は朝の会や帰りの会での設定が多いため、短時間での児童生徒への説得力のあるストーリー展開の構成に困難を要する。受講生の実演する模擬授業の内容が当該教科の学習指導要領解説の記述内容に即しているかどうかを厳密に審査し、児童生徒の日常生活との関連性を明示したうえで、児童生徒にしっかり伝わる構成になるように指導をおこなっている。例えば、中学校技術では、材料と加工の技術では木材加工の授業の事例が多いが、生活や社会の中から技術に関わる問題をみだして課題を設定するために、SDGsの「つくる責任、つかう責任」をとりあげ、持続可能な消費と生産のために、児童生徒が社会貢献に役立つものづくりについて考える場面を設ける。海岸に打ち寄せ

られたプラスチックごみや発泡スチロール、および流木を使って風力発電装置の製作を実践し、ペットボトルや使い捨てマスクで風車を、流木を使ってロータやシャフトを加工しながら社会貢献について考えを深めることが可能となる。さらに、再生可能エネルギーにも展開するためSDGsの「エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」にも波及効果が期待される。これだけでなく、理科の第一分野「(3) 電流とその利用」の「(ウ) 電流とそのエネルギー」、および社会科学の地理的分野における「環境やエネルギーに関する課題」などの単元との教科横断型の授業展開の可能性をアピールできる。このほか、高等学校理科の基礎物理で力学の授業において物体にかかる力を学習するとき、1個の卵を立てておもりを載せると簡単に卵が割れる状況を生徒に見せた後、次に10個の卵を用いて同じ実験で卵が1個も割れない状況を確認させ、自分の体重を支えるための卵の個数を算出させることで探求につながる授業になった。受験区分で小学校の受験者が選択する授業の最も多いのが「大造じいさんとガン」で、大造じいさんの残雪に対する考え方の変化に児童が気づけるような授業展開の工夫について指導している。音楽でもみじの2部合唱の授業では、指導者が児童役を務め受講生から直接指導を受ける。高等学校体育の創作ダンスの授業でも指導者が生徒役を務め、受講生の指示に従ってダンスを実演する。場面指導では、保健体育および養護教諭共通で「飲酒・喫煙・薬物乱用と健康」、「ストレスが身体に及ぼす影響」、養護教諭で「用もなく保健室に来る生徒への対応」、「教科書を隠されて泣きながら保健室に来た女子児童への対応」などが受講生にとって難しい題目であった。個別指導では各学年で学習する漢字、漢字の筆順、言葉づかいと抑揚のタイミング、授業の構築について細かく助言をおこなう。なお、授業内容で教科の専門に関わるものは事前に受講生の所属するゼミの指導教員に相談してから対応している。通常の教育実習では5ページほどの指導案を作成するが、模擬授業の場合は1ページにまとめたものを準備させている。図9に中学校理科の指導案の例を示す。授業中にページをめくることがないので進行に障害がなく、授業展開を要所要所で確認できるようにするためである。指導案の詳細部については、紙面に記述せず自分自身のものになるまで練習を重ねることを推奨している。ほとんどの受講生は、5回ほどの指導を経て指導案を見ずマイペースの授業展開が身についている。教職実践演習の模擬授業の全体講義において、複数の受講生に小学校主専攻および中学校主専攻それぞれの教室で模範授業を依頼された事例もあった。

第2学年 理科学習指導案

1. 単元名 単元1「化学変化と原子・分子」
第3章 化学変化と物質の質量 (大日本図書 理科の世界2年 P.58～61)

2. 本時の学習

(1) 目標

化学変化の前後における物質の質量を測定する実験を行い、質量保存の法則が成り立つことを理解し、文章や化学反応式を使って説明できる。

(2) 展開

過程	生徒の学習活動	形態	教師の指導・支援
導入 5分	1. 食酢と重曹、食酢と牛乳を混合させる演示実験を観察する。気体や沈殿が生じたことで、反応前後の質量がどのように変化したのか考える。	一斉	・家庭にあるもので実験が行えることを伝え、生徒の興味を引き付ける。 ・食酢と重曹の実験では、「完全に密閉して実験を行ったらどうか」という問いを投げかける。
展開 35分	2. 課題について把握する。 課題：化学変化の前後で物質全体の質量はどのように変化するだろうか。 3. 導入の実験をもとに予想を立てる。 4. 実験方法を確認し、実験中起こりうる事故のロールプレイングを行い、注意を喚起する。 A-①NaHCO ₃ とHClが入ったペットボトルの質量を電子天秤で測定する。 A-②傾けてNaHCO ₃ とHClを反応させる。 A-③ペットボトルの質量を測定し、蓋を開閉し、再度質量を測定する。 B-①ピーカーにNa ₂ CO ₃ 水溶液とCaCl ₂ 水溶液を別々に入れたものを電子天秤に置き、質量を測定する。 B-②Na ₂ CO ₃ 水溶液とCaCl ₂ 水溶液のピーカーに加え、質量を測定する。 5. 実験を行い、結果を板でまとめる。 6. 班ごとの測定結果を黒板に記入し、実験中に気付いたことを発表する。 測定結果や気付いたことをもとに、質量保存の法則を説明する。化学反応式をもとに質量保存の法則について考える。	一斉 個人 一斉	・予想は「増える・減る・変わらない・その他」から選択し、根拠も考えさせる。 ・劇薬であるHClの危険性について考えさせ、以下の防止事項と対応方法について確認を行う。 ・開栓の際、塩酸が飛び散る危険性があるの十分注意させ、開栓の状態を慎重に指し示す。 ・HClが手に付着した場合速やかに洗浄し、すぐに雑巾で拭くなどの注意を促す。 ・保護メガネの使用を義務付ける。 ・気体の発生を確認のために、ペットボトルを押すこと、開栓の際の現象に注目することを説明する。 ・実験方法や安全確認に不備がないかどうか、机間指導をしながら確認する。 ・結果から客観的に考察させるために、「すべての班に共通して言えることは何か」という問いを投げかける。 ・測定結果に誤差が見られて、混乱が起こった場合は、用いた電子天秤の誤差の値について説明を行う。 ・化学反応式を示し、反応前後で原子の数は変わらないが、原子同士の結びつきが変わることに気付かせる。
まとめ 10分	7. 質量保存の法則について、文章や化学反応式を用いてまとめ、発表する。	一斉	評価 ・質量保存の法則について文章や化学反応式を用いて説明できる。

図9 模擬授業での指導案の例

3.5 面接

試験当日の面接では、過度の緊張により練習により整理していた回答を忘れてしまうことや、質問に対して誤った回答をしてしまうこともあるため、いかなる状況でも落ち着いて自分の考えを自分の言葉で回答できる胆力を身につけなければならない。個別指導では新聞記事やドキュメンタリー動画を通して課題解決のための独創的なアイデアとそれとともに新たな課題について、常にノートに自身の考えをまとめる作業を積み重ねることを勧めているので、一般常識・一般教養が自然と身につけていた。そのため、「現在不登校の児童生徒が多いですが…」よりも、「令和2年の調査では、わが国の不登校の児童生徒数は19万人と言われておりますが…」の回答のほうが説得力がより伝わりやすい。さらに、集団討論に積極的に参加することにより、他者の立場になって考える力や、俯瞰的・多角的視野も自然と身につけており、面接に特化した指導をおこなわなくても、自分の考えを自分の言葉で説明できるようになる。したがって、本個別指導の中で、面接指導に要する時間が最も短い。ただし、丁寧語、尊敬語、謙譲語の使い分けや「ら」抜き言葉など言葉づかいの修正、質問の趣旨に対する回答内容の適合性については適宜指導をおこなっている。

4. さらに効果を上げる指導

4.1 教育実習の個別指導

教育実習については5月下旬から6月上旬にかけて熊本市内の小中学校への協力校実習の時、受講生から要望を受けた場合適宜対応している。教育実習の指導は、受講生所属のゼミ担当教員を訪ね、必ず許可を受けてから対応している。児童生徒の理解の確認のための机間指導、発問を促すための学習の形態や声かけの工夫、板書とICT機器との上手な使い分けなどが共通の課題であり、授業直後の指導は避けて、3日から1週間ほど経過して振り返りに時間をかけた後に個別指導をおこなっている。

特に指導に要したのは教具・教材の工夫である。養護教諭養成課程の受講生は中学2年生に対する歯磨き指導において、保健室備え付けの口腔模型を用いて授業の練習をおこなっていた。そこで、手作りの模型を使って虫歯の危険性と歯磨きの重要性を直接生徒に伝えるような授業展開を提案した。まず、電化製品の梱包材で使われている発泡スチロールで下あごの歯並びを組やすりで丁寧に成形させた。歯間の食べかすに相当するものとして接着剤を取り上げ、それを歯間部に数滴垂らすことでその部分の発泡スチロールが少しずつ溶けていくようすが確認できる。授業当日は教室内で驚きの声があがり多くの生徒に虫歯の危険性と歯磨きの重要性が伝わっていた。本人は工作に自信がなかったが、生徒への伝わりやすさを第一に考え毎晩遅くまで試行錯誤を繰り返しながら製作した。その結果、授業本番では多くの生徒が興味をもち、受講生はやりがいにつながる瞬間を味わっていた。

4.2 出前授業へのTA参加

受講生は学校現場の経験は教育実習でしか機会がない場合が多い。教育実習では毎日の授業づくりに時間を要してしまい、学校現場の本質を体感したり、児童生徒と授業を楽しむ余裕をもつのが困難である。著者は小中学校から総合的な学習の時間や算数および理科の時間に出前授業の要請を受け、TAとして希望する受講生も引率している。熊本地震の被災地では仮設の校舎で実施したこともあった。出前授業では教育実習と異なり、参加受講生は余裕をもって実際の学校現場の雰囲気に触れることができる。同じ自治体における学校間の違いや、県外の学校にも出かけるため自治体による違いにも気づく機会となっている。保護者会や放課後児童クラブが主催の場合は、保護者とのコミュニケーションの機会が多くなるため、教育実習では味わえない体験が得られる。

国内のみならずタイ王国のカセサート大学附属学校やダンチャーンウッタヤースクールでも実施し、海外の場合は英語で授業をおこなうため英語の必要性や異文化の魅力と日本の教育との相違について実感をともなう学びも体験できる（図10参照）。授業後は国立公園でサイエンスキャンプに参加し、動植物や星座の観察を通して現地教員から専門知識を享受する機会もある。出前授業では「わかった」、「教材が動いた」の感動を児童生徒および保護者の方々と共有する場面が多く、これまで受講生は採用試験に合格したいという自分の幸せを中心に考えがちであったが、出前授業に参加するたびに、児童生徒はもちろん教諭や保護者の方々に感謝される経験を積み重ねることで、教員になることの意義についてみつめなおすことになり、図11に示すように他者の幸せのためにやり抜くことの意義に気づく。児童生徒および保護者のために頑張るといった考えが根づくことで、児童生徒および保護者を第一に考える教員を目指すようになった。

このように、出前授業などボランティア活動で学校現場をより多く知る機会を設け、多くの児童生徒および保護者の方々と共同作業を経験し感動を共有することで、おのずと受講生に教職観が育成されていった。

4.3 勉強合宿

著者のクラブ活動指導経験¹⁸⁾に基づき休日に学外での勉強合宿で学習効果を狙う場合がある。志を同じくする受講生と寝食をともにすることで、集中力、団結力、モチベーションの向上および個々の教職観の育成について、学内での個別指導より効果が得られると考える。図12に示すように、受益者負担で地域のコミュニケーションセンターを借りて、模擬授業、集団討論、全体講義を中心に無駄なく計画的に実施している。受講生が通常の個別指導よりリラックスして参加できる環境づくりに心がけている。

5. 個別指導の成果

表2に、これまで来室した受講生の所属と人数を示す。幼稚園、小学校、中学校、高等学校の受験区分すべてまとめて270名中168名が合格し、合格率62%（卒業生を除くと、245名中145名が合格し、合格率59%）である。これまで35名の受講生から個別指導を終了した時手紙をいただいた。その中の2例を図13および図14に示す。このように、個別指導の前後で教職観が大きく変化したことがわかる。一方採用試験に失敗した受講生はすぐ切り替えて次年度へ



図10 ダンチャーンウッタヤースクールでのSDGsに関する出前授業

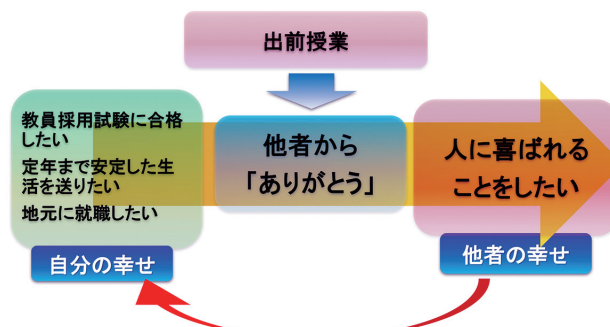


図11 受講生の考え方の変化



図12 勉強合宿のようす（集団討論の準備）

のリベンジに備える者もいるが、不合格のダメージが重い受講生の場合は、1月までは卒業研究に集中するために試験勉強から一旦離れ、卒業研究がすべて完了してから来室してもらい、図15に基づきモチベーションを復活させるための授業を実施する。精神論を伝えるのではなく、第二希望や第三希望の道をたどることで身につく人間力や時間を置くことで気づく失敗の原因などの副産物をメリットとし、著者の経験など実例をあげて受講生が納得できるまで時間をかけて丁寧に対応する。また、合格した受講生の中には授業力を身につけるため、担任として児童生徒および保護者としっかり向き合えるようになるために、3月の卒業式前日まで個別指導に来室す

に配属させられやる気のない旨の相談を受けたことがある。「生徒は好きなクラブ活動を選べるが顧問までは選べない。」など生徒を第一に考えるような指導を継続した結果、クラブ活動に対する姿勢が変わり、顧問としてではなく新入部員として生徒から技能やルールを学びながら練習を楽しむようすが書かれた手紙をいただいた。

6. おわりに

単に学生の教員採用試験の対策に向けた学習指導のみならず、将来教職に就くための教職観や社会人としての人間力の育成を目指した10年間の個別指導の実践例を紹介した。自分の意見を他者に受け入れてもらうためには、自分の正義を振りかざすのではなく、まずは固定観念や先入観を払拭し、他者の立場に立って考える胆力を身につけることが重要である。その結果、児童生徒および保護者の立場に立って考え行動ができる教員となり、児童生徒および保護者を第一に考えるような教職観が育成される。そのためには、多くの児童生徒および保護者、さらには地域の方々と感動を共有する体験を積み重ねる必要がある。

本個別指導を求める受講生はもともと教職志望の強い学生であり自ら指導を求めてくるため、教職に消極的な学生と比較すれば指導に困難をきたすことは少ない。しかしながら、教職課程の学生の中には、教職志望でない、最初は教職志望であったが途中で断念した学生も少なくない。これらの学生も教職へのモチベーションが向上するようより効果的な指導方法を導き出すために、学校現場と教職課程の学生の実態を常に把握しながら課題解決に向けて研鑽を重ねていく決意である。

謝 辞

個別指導にあたり、通常の個別指導の場所の提供や勉強合宿および出前授業への参加など、これまで多くの学科の教職員のみなさまのご理解とご協力のおかげでおこなわれたことを記し、謝意を表します。

参考文献

1) 文部科学省：国立の教員養成大学・学部及び国私立の教職大学院の令和3年3月卒業者及び修了者の就職状況等のポイント、Web ページ、<https://www.mext.go.jp/> 2022 0126-mxt_kyoikujinzai01-000020177_1.pdf, 2022, 参照日：2022-8-1

2) 「先生が足りない（下）教員採用試験 4年生の半数が受けない！ なり手不足に大学は模索」、中日新聞、2022年4月28日版、2022

3) 「小学校教員採用試験の競争率、2.5倍で最低更新 21年度」、日本経済新聞、2022年9月9日版、2022

4) 「鹿児島県教職員採用1次試験 倍率は過去10年で最低の2.6倍」、南日本新聞、2022年7月11日版、2022

5) 佐々木頭彦：教職課程履修者の教職回避に関する調査研究—英文科の学生を対象に—、武庫川女子大学 学校教育センター年報、第4号、pp.89-101、2019

6) 今野博信、阿知良洋平：当事者と考える教員志願者数減の理由、室蘭工業大学紀要、第71号、pp.60-73、2022

7) 藤原和政、川俣理恵、福住紀明：教職課程を受講する大学生の教職に対する不安の探索的検討、教育カウンセリング研究、第10巻、第1号、pp.41-45、2020

8) 伊藤直樹：明治大学における教職課程履修学生の教職に関する意識、明治大学教職課程年報、第42号、pp.9-18、2020

9) 前田一男、佐藤良：教職課程の学生による教育実習に関する経験：教育実習における困難とその解決、教職研究、第14号、pp.91-104、2014

10) 中雄勇人、霜触智紀：教員養成学部在学生の教職に関する志望度調査、群馬大学共同教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編、第56巻、pp.93-97、2021

11) 山田美都雄：教員養成大学入学後の教員志望及び志望変更に関する計量的分析、宮城教育大学紀要、第56巻、pp.349-362、2021

12) 内田実、溝口宏彦、伊藤信成：教職支援センター教員養成支援部門における教員採用対策—その成果と課題—、三重大学教育学部研究紀要、第72巻、pp.531-539、2021

13) 池田拓人、本山貢、永井邦彦：和歌山大学教職・キャリア支援室の取り組みと教員採用状況の推移、和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要、第25号、pp.121-127、2015

14) 山口美和、河野誠哉、酒井真由子、西朋子：大学における教員就職支援の利用実態と教育効果：国立大学教員養成学部4年生への質問紙調査の分析から、山梨学院生涯学習センター紀要、第23号、pp.55-78、2019

15) 谷川尚己、井田仁美、橋本源之助：実践的指導力のある教員をより多く輩出するために：一元的・体系的な教員採用試験支援策の実践について、びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要、第10号、pp.137-144、2013

16) 引地力男、Narumol Vongthanasunthorn：出前授業を利用した国際連携大学へのキャリア教育の支援に関する検討、工学教育、第59巻、第4号、pp.21-26、2011

17) 引地力男、精松伸二、鎌田清孝、田中智樹：キャリア教育を目指した離島小学校へのものづくり教育支援、工学教育、第60巻、第6号、pp.150-155、2012

18) 引地力男：たかがクラブ活動、されどクラブ活動、工学教育、第69巻、第1号、p.104、2021